

「母子相互作用の臨床応用に関する研究」の評価

評価委員 白井 常

昨夏米国のラトガース大学付属ダグラス・カレッジを19年振りで訪れた。1966-7年に教鞭をとった大学で、その頃親しくしていた隣室の児童心理学者で、現在心理学研究室経営の保育所長を兼任しておられる方と久し振りに話しているうち、偶々話題が母子関係の問題に触れたとき、「乳児期に母子関係が重要だと考えられるようになったのは、医者の研究が多い故ですよ。僕はむしろ幼い時から保育所で専門家に育てられる方が良いと思っています」と言われた。そこで、この学際的研究班のことを紹介して、筆者も心理学の専攻者なのだが、医学の方たちといっしょに母子相互作用の重要性を強調しながら、それぞれ研究を進めているのだと話した。

この研究は6年も続いて、今年一応の区切りをつけることになった。筆者はこの3年間評価委員として研究班に参加し、毎年諸々の成果が発表されるのをどんなに楽しみにまた有意義に伺ったことだろう。動物の子育てに関する比較行動学的研究、人間の発達に関しては胎児期から幼児期まで、健常児も障害児も含まれ、本当

に多岐に亘って研究が進められた。文字通り学際的な研究班で、これだけいろいろな分野の研究者が、母子相互作用の重要性を認めながら研究を進めているグループは世界にも少ないと思われる。この研究班に携って行くうちに、乳児の見方が変わってきたという方もあった。

昨年と比べると、幼児に関する研究発表が大部ふえているが、それでも新生児期や乳児期に比べるとまだ少ないように思われる。とくに、幼児初期の3歳未満の家庭児については、その時期の重要性、特に子どもが自我に目覚めたとき、それまでの閉じた生物的母子関係から開いた人格的關係に切り換えなければならない点を家庭に止まっている母親に気づかせる機会に乏しい。乳児期のアタッチメントがそのままの形で続いてはいけないことを、客観的な研究データに基づきつつ、養育者にアピールすることが大切である。したがって、幼児初期における母子相互作用の研究がもっと進められなければならないことを痛感する。